



University of the Ryukyus Library Bulletin Vol.34 No.3 (No.131) July. 2001

「大学所蔵資料と歴史学」

豊見山 和行

1 歴史学とコンピューター

カビくさい古文書や古記録を一枚一枚、鉛筆で筆写し、さらに大量の史料をカードに分類・整理する。それらの史料を元に論文を仕上げる。ほんの10年ほど前までの、私のような古い時代（前近代史）を研究する文献史学研究者の基本的な研究スタイルは、そのようなものであった。「糊とハサミの歴史学」と揶揄された、ローテクによる研究スタイルが近年、様変わりしつつある。



「宮良殿内文庫資料集」文庫資料番号273（仮）墓地風水図(ぼち ふうすいず)

年代不明。19世紀頃か。56.7×70.0cm。1枚。

本絵図は、石垣島における風水思想や歴史地理情報を得る上でも貴重な史料である。

目次	次
「大学所蔵史料と歴史学」	文献紹介：幕末の異国船来琉記と当時の琉球の状況 - - 豊平朝美 6
..... 豊見山和行 1	お知らせ 8
本館1階に貴重図書室を設置..... 3	
Web of Scienceを体験しよう..... 4	

附属図書館のホームページ (<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/>) もご覧下さい。

そのキーワードは史料のデジタル化、流行の用語で言えばIT化である。およそハイテクとは縁がないと思われていた歴史研究の領域にもデジタル化の波は、急速に押し寄せている。

デジタル化は、インターネットの爆発的な拡大とともに史料を所蔵する機関（公文書館、大学図書館等）のあり方をも変えつつある。「史料の保存と利用・公開」という相反する役割を同時に担わされている史料所蔵機関において、貴重度の高い史料ほど旧来その閲覧のガードは堅かった。東京などでの学会や研究会への出張の際、ついでに史料調査を行うこともよくある。史料目録から予想外の史料を見つけだし、その閲覧を急ぎよ申請すると、所蔵機関によっては「館長決裁が必要」とすげない返事をもらうこともあった。そのたびに、貴重史料を飛び込みで閲覧申請することの「非常識さ」を自覚しつつも、原本史料へのアクセスをもっと容易に実現できる方法はないものかと歎息した。

そのような状況を史料のデジタル化が変えつつある。原本史料の情報発信について、その取り組みが弱い機関もまだまだ多い。しかし、デジタル化の波はもはや押し止めることはできない情勢になってきた。

文献史料をあつかうものにとって、史料目録は原本史料へアクセスする際の第一歩である。そのため各種の史料目録を備えておく必要があるが、印刷物主体の旧来の目録類は一度、印刷・刊行されるとめったに増刷されることはない。また、史料目録は少数しか発行しないため、その入手も簡単ではない。そのため所蔵機関に赴き、そこでようやく目録をめぐって探索する場合が多かった。このスタイルも変化しつつある。旧来の印刷物を媒体とした目録からデジタル化によって、パソコンで検索することが可能になってきたからだ。「死んだ情報」に等しい印刷物の史料目録をデジタル化し、インターネット上で公開すれば、世界中から検索することも理論上は可能となった。

2 原本史料のデジタル化と史料のネットワーク

近年、各所蔵機関が目録や古文書、典籍等を画像やテキストデータとして各館のホームページから情報発信するスタイルが一般化しつつある。例えば、台湾大学図書館の「台湾研究資源」（<http://www.lib.ntu.edu.tw/spe/taiwan/taiwan.html>）、東京大学史料編纂所・画像解析センターの「入来院文書の釈文、画像、解説」（[\[tokyo.ac.jp/index-j.html\]\(http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/academic/mdl/index.html\)）、そして琉球大学附属図書館の「宮良殿内文庫資料集」（<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/academic/mdl/index.html>）などは、そのほんの一端にすぎない。](http://www.hi.u-</p></div><div data-bbox=)

原本に近い状態の画像をパソコンで利用できる利点は大きい。第一に、貴重史料や痛みのある原本文書そのものを頻繁に閲覧させる必要がなくなる。ひとたび画像処理すれば、パソコンの端末で検索し、ディスプレイやプリントアウトで済ませることができる。パソコン画像での不明な点を調査・確認したい、という場合などに限って原本の閲覧を制限すれば、「原本を保存しつつ公開する」という所蔵機関の悩みを解決することにもなる。

第二に、研究室に居ながらにして原本史料を確認することが可能となった利点も大きい。文献史研究では、古文書等を活字で印刷した様々な翻刻史料集を利用することの方が多い。しかし、それらの印刷物には誤植・誤読がつきものである。そのため、疑問箇所を原史料と照合する必要があっても、旧来、その確認作業は容易ではなかった。研究対象の原本史料（コピー等含む）をすべて手元やあるいは手近に確保することなど不可能に近いからだ。

原本史料をデジタル化された画像で確認して、ようやく史料の意味を確定した体験がある。琉大附属図書館は、大量の宮良殿内文書をすべて画像処理して公開しているが、その中の史料のひとつに「進貢船・接貢船、唐人通船・朝鮮人乗船・日本他領人乗船、各漂着并破損之時、八重山島在番役々勤職帳」という長いタイトルを持つ古文書がある。とある活字史料集がそれを全文翻刻しているが、疑問の箇所があった。それは、キリスト教徒（キリシタン）を摘発するために、キリシタンらが所持する道具類のひとつとして、「十め此ほねにても木にても作候て持也」と翻刻された箇所の「十め」という部分がそれである。そこで、パソコンで宮良殿内文書の原本へアクセスして確認すると、それは「十如此、ほねにても木・・・」（53丁目）であった。「十如此」（十、此のごとく）と読むべきところを「十め」と誤読したために全く意味のとれない文言となっていたのである（「め」と「如」の草書体は紛らわしいが）。

ちなみに前述の部分を現代語にすると、キリシタンらは「十のようなもの（十字架のこ）を骨や木で作って所持している。」とスッキリ解釈できた。簡単に原本と照合できる利点は、このように大きい。貴重な古文書類の画像史料を個別の機関が、それ

それぞれのホームページから発信するだけの段階を脱却しようとする新たな動きも見られる。そのひとつが、東京大学史料編纂所による「前近代日本の史料遺産プロジェクト」である。「電子情報化された史料遺産（大量の史料の画像情報、全文情報、索引情報など）」に関する複合型のデータベースを構築しようとする、壮大な構想である。各地の史料所蔵機関をリンクするネットワーク型のデータベースの構築には、各大学図書館のデジタル化の充実化が不可欠である。

幸いにも琉大附属図書館は、大量の琉球・沖縄関係史料を所蔵している。それらのデジタル化をより一層充実させることによって、ネットワーク型の琉球・沖縄関係史料の発信拠点となることを期待したい。そして、その実現のための人的・資金的な援助が学内的に採られることをも希望したい。

(とみやま かずゆき：教育学部助教授)

本館 1 階に貴重図書室を設置

図書館では本館 1 階に「貴重図書室」を設け現在、調整作業を行っています。同室は、空調設備を備えた木造の部屋で、資料保管室と貴重資料閲覧コーナーから成っており、沖縄資料室等から移動した次の資料を保管することになっています。

利用にあたっては、「貴重資料利用願」が必要ですので、ご注意ください。

- (1)伊波普猷文庫 161点
- (2)島袋源七文庫 115点
- (3)宮良殿内文庫 350点
- (4)仲原善忠文庫(一部) 50点
- (5) Bull文庫 560点
- (6)宝令文庫 56点
- (7)原忠順文庫 39点
- (8)矢内原忠雄文庫 111点
- (9)仲宗根政善沖縄方言資料
329冊

- (10)言語学基本図書コレクション
(19世紀刊行の洋図書)
- (11)その他の貴重資料



Topic! 伊波普猷文庫もデジタル化

琉大図書館では、豊見山助教授の寄稿文にある「宮良殿内文庫」に続いて「伊波普猷文庫」(URL : <http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/iha/>)をデジタル化してホームページからアクセスできるようにしております。引き続き「仲宗根政善言語資料」のデジタル化もすすめています。